

論文審査及び最終試験結果報告書

論文博士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域政策研究講座		
学籍番号	-	氏名	工藤 裕介
審査委員	主査	北原 啓司	
	副査	平井 太郎	
	副査	土井 良浩	

(論文題目)

街なかまちづくり活動におけるプロセス支援の方法論に関する研究

(論文審査の要旨)

中心市街地活性化が叫ばれ、郊外に移動した人々のライフスタイルを、再び中心市街地に引き戻そうとする動きが登城してから、既に15年が経過しようとしている昨今、これまでの中心市街地のまちづくり実践が、結果的に、地域人の自主的・自律的な取組として成立せず、単純に事業を進めるための補助金の取得や事業年度内の単純な予算の消化に陥ってしまっている状況に合って、まちづくりの支援という言葉は持つ曖昧性を排除して、あくまでもまちづくり活動におけるプロセスであると定義し、その方法論を、これまでのいくつかの実践の中から打ち出そうとする論文である。

その方法的特徴として、ソフトシステム方法論（以下SSM）を援用しており、これは活動者の主幹を重視するシンプルかつ強力な方法論であり、それが著者の研究フィールドである黒石市のまちづくり活動の場面に見いだすことで、方法論の妥当性を検証するとともに、一方で、満足できる成果になかなか結びついていない大館市の事例の要因を、SSMから明らかにしている。

具体的には、米国のメインストリートプログラムに見いだせるフレームワークを、まちなかまちづくり活動の中に構築し、SSMの方法論に則り、個々の活動を切り取り、記述していく手法を取っており、それによって、まだ不十分ではあるものの、黒石市のまちづくり活動が、その方法論によって十分記述することができ、かつ今後の持続可能性も期待できるものであることを明らかにすることができ、一方でこれまでの街なかまちづくりが、どのような要因で継続した成果をあげることができないかという点についても、大館市の活動分析によって検証することができた。そこで著者は、そのような活動のことを、最終的に「街なかまちづくり活動」ではなく、単なる「街なかでの組織活動」と再定義している。

将来的には問題意識を持った活動者がこの方法論を十分活用できるように必要な検討を今後の課題としており、しかもそれが商業関係者だけではなく、町内会等の住民も巻き込むようなまちづくり活動に発展していく必要性和可能性を論じている。

(最終試験結果の要旨)

著者が数年にわたるフィールドワークで進めてきた研究活動は、それ自体がひとつの街なかまちづくり活動であり、それを実践的な分析から方法論として構築していこうとする目的は、ややもすると方法と結果が常に入れ替わるような危険性も内在するが、最終的に目的、方法、そして結果への流れを明確に整理することができ、主査および二人の副査全員一致で、合格と判断した。なお、実践的なガイドブック等に出版されることを期待したい。